

# もののいえないもの

小川未明

青空文庫



敏ちゃんとしは、なんだかしんぱいそうな顔かおつきをして、だまつて  
います。

「どうしたの？」と、姉ねえさんがきいてもだまつています。

「おかしいわ。いつも元気げんきなのに、けんかをしてきたんでしょ  
う。」

「ばか。だれがけんかなんかするものか。」

「じゃ、どうしたの？」

「なんでもないのでよ。」

敏ちゃんとしは、あちらへいってしまいました。そしてまた、考かんがえ  
ていたのです。それには原因げんいんがあつたのです。わけといて、

ただお友だちの徳ちゃんが、今日川へ釣りに行って見てきたことを話しただけです。

「今日、僕、釣りにいったら、一匹の大きなへびがいなごをのんでいるのを見たんだよ。へびって、にくらしいやつだね。だから、石をなげてやった。」

「そうしたら、どうしたい？」

「どこかへは行って、見えなくなってしまったよ。」

話というのは、ただこれだけです。けれど、敏ちゃんにはその話がなんでもなくなかったのは、つい二日まえのことでした。長いあいだかわいがっていたきりぎりすを、その田んぼの方へ逃がしてやったからです。なぜ、そんなにかわいがっていたきりぎり

すを逃がしたかというのに。

ちようど兄の太郎さんが、お庭で草をとつていましたが、家へあがつてくると、

「くもという虫は、りこうなものです。平生は、おくびようですぐ逃げるくせに、子供を持っているとなかなか逃げないで巣の中にじつとして、子供をまもっていますよ。かわいそうだから、その草をぬかずにおきました。」と、話しました。

「きつと、くものお母さんでしょう。くもにも母性愛というものがあるのでしょね。」と、お母さんがおっしゃいました。

そのとき、敏ちゃんは、のき下にかかっているかごの中の、きりぎりすを見あげていましたが、

「きりぎりすにもお母かあさんはあるの？」と、ききました。

「それは、あるわよ。敏としちゃん、逃にがしておやりよ。」と、姉ねえさんがいいました。

「かわいそうだから、僕ぼく、いやだ。」

「かわいそうだから、逃にがしてやるのよ。」

「雨あめがふつたり、風かぜが吹ふいたりするじやないか。」

「それはしかたがないわ、やぶの中なかに住すんでいるのだもの。それよりか、こんなせまいかごの中なかに入れておくほうが、よっぽどかわいそうだわ。」

姉ねえさんと敏としちゃんとは、そんなことをいいあっていました。

「もっと大きおおなかごに入れてやればいいんだ。」と、兄にいさんがい

いました。

「だんだんきゆうりがなくなるから、それより逃にがしてやったほうがいいでしょう。」と、お母かあさんがおつしやいました。

敏としちゃんは、くもの話はなしから急きゆうに自分じぶんのきりぎりすが問題もんだいにな

つたのが、わからないような、理由りゆうがないような気きがしましたが、  
考かんえているうちにだんだん、こうしてきりぎりすをかごの中なかに入い  
れておくことは、よくないように思おもわれたのです。

「逃にがしてやったら、お母かあさんにあえる？」

「それは、わからないけれど、きつとよろこぶにちがいありませ  
ん。」

とうとう、敏としちゃんは、かわいがっていたきりぎりすを、明日あす

逃がしてやることにしました。あくる日は日曜日だったので、姉さんと二人でとおくの田んぼへ持つていつて、人に捕らえられないような、また近くにきゆうりの畠のあるようなところへ放してやることにきめました。

「そういうのがわかると、敏ちゃんはいいい子です。」

「ほんとうにいい子よ。」

「いい子だわね。」

そのとき、敏ちゃんは、お母さんにも姉さんにもほめられました。こんなことは、めったにありません。しかし、あまりうれしくはなかったのです。

いよいよあくる日となって、きりぎりすを逃がしてやりました。

ところ  
所は、徳ちゃんかへびを見たという近くの草やぶでした。さいし  
よ、かごの中かからきりぎりすを出してやると、よろこんでとんで  
いくと思いのほか、じつとして草の葉の上にとまって動きません  
でした。

「弱っているんだね。」と、敏ちゃんはかわいそうになりました。  
「いいえ、はじめて広いところへ出て、びっくりしているのだわ  
。」と、姉さんは、そのおどろいたようなきりぎりすをながめて  
いました。

そのうちに、きりぎりすは長いひげを動かして、草のしげった  
中へはいつていきました。そのさびしそうなようすが、敏ちゃん  
の目にいつまでものこっていました。

「やはり、お家うちにおいたほうがよかつたかな。」と思つていたところへ、徳とくちゃんきょうが今日、へびの話はなしをしたからです。

なるほど、へびというようなおそろしいものが、やぶの中なかに住すんでいることに気きがつかなくなつたと、敏としちゃんかあは後こう悔かいをしました。しかし、そんなことをいまさらお母かあさんや姉ねえさんにいつてもしかたがないと思おもつたので、自分じぶんひとりで逃にがしてやつたきりぎりすのことを思おもい出だしていたのです。

「やはり、お家うちにおいてかわいがつてやればよかつたんだ。かわいそうなことをしたなあ。」と思おもつていると、そこから、

「敏としちゃんなか！」と、仲なかよしの徳とくちゃんこえのよぶ声こえがしました。

「いま、いくよ！」

とし  
敏ちゃんきゆうげんは急に元氣げんきになってとびだしました。

あちらで、カチカチという紙芝居かみしばいの音おとがきこえていました。

とく  
「徳ちゃん、カチカチカチだよ。」

「カチカチなら、聞きこうよ。いいおじさんだものね。」

「ああ、ドンドンなんか、これから聞きくのをよそうよ。」

ふたり  
二人は紙芝居かみしばいのひょうし木ぎの音おとのするお宮みやのけいだいへ、急いそ

いでいきました。

ふたり  
二人は、カチカチとひょうし木ぎをたたいてくる紙芝居かみしばいのおじ

さんと、ドンドンとたいこをたたいてくるおじさんの二人ふたりについ

はな  
て話はなしたのであります。この二人ふたりのおじさんは、いずれもじてん

車しゃののつてきました。カチカチのほうは、黒くろい目めがねをかけ、せ

びろの洋服ようふくをきてパッチをはき、くつでありました。ドンドンのほうは、白いシャツしろに長いズボンながをはき、板いたぞうりに帽子ぼうしをかぶっていました。

カチカチは、このあいだ「ゆかいなピンタン」をやりました。ドンドンは「ねこ娘むすめ」をやりました。どちらもお話はなしが上手じょうずでしたが、カチカチはかえるときに、「ありがとうございます。」といつて、かえりました。

ドンドンはだまって、すうつといつてしまいます。また、カチカチは子供こどもが高いところからおちてころぶと、すぐにかけてきて、「なんともなかった？」と、やさしくききました。そしてその子供こどもが泣ないていると、お金かねをやらなくても、あめをくれたのであり

ます。これを、二人は見て知っていました。

「あのカチカチのおじさんは、いいおじさんだね。」と、敏ちゃんがいうと

「やさしい、いいおじさんだなあ。」と、徳ちゃんもいったのです。

「ドンドン、小さい子がころんでも、知らん顔をしているね。」

「泣くと、あっちへいけというだろう。あんな人は悪いおじさんだね。」

「僕、カチカチすきだ。」

「僕も。」

こういつてから、二人はカチカチのひいきとなったのでした。

「黄金バツトかな。」

「そうかもしれないよ。」

カチカチのおじさんは、もうはじめていました。

「たこ坊主のおかみさんに、どうぞ夫の仇をうってくださいとた

のまれる、ヨシ、そんなら私が仇をうってやろうと、かつぱの親

分は、さつそく子分をよびあつめて、水をくぐつてみつからな

いように、摩天楼に近づくように命じました。早くもそれを感じ

じてノラクロは、このことをアグチャンに報告したのでありま

す。」

お宮のけいだいにあつまっている子供たちは、ねっしんに聞いて

ていました。

お話をすむと、徳ちゃんが、「敏ちゃん、おいでよ。」といったので、敏ちゃんは徳ちゃんのお家へ遊びにいきました。徳ちゃんのお家はあらもの屋でした。おばさんはいい人で、徳ちゃんにやさしかったのです。また、おばさんはねこがすきで、黒い大きなねこがいました。そのねこをおばさんは、たいそうかわいがっていました。

「こいつは、ずるいやつだよ。」と、徳ちゃんがいました。

おばさんのいるときは、おとなしくしているけれど、おばさんのいないときには、よく悪いことをするのだそうです。

ちようど、おばさんのいるときでした。黒ねこはおとなしくねむっていました。敏ちゃんがだくと、やっとだけるほど重かった

のでした。しかし、なにをしても目をほそくして、「ニヤア。」  
とないていました。

今日、遊びにいくと、ちようどおばさんはるすでした。敏ちや  
んが、あちらにねむっている黒ねこをよんでも、ふり向かないの  
であります。徳ちやんが大きな声を出してよぶと、あちらを向い  
たままで太い尾を動かして、ちよつとたたみをたたいたばかりで  
した。

「子供だと思つて、ばかにしているのだね。いまに、ばけねこに  
ばけるかもしれないよ。」

「ああ、なかなかわるいやつだよ。このあいだ、お母さんが仏さ  
まにあげておいたあんパンを一つ食べたのだよ。お母さんは、僕

が食<sup>た</sup>べたというんだもの。いくら僕<sup>ぼく</sup>でないといつても、お母<sup>かあ</sup>さんは、ほんとうにしないのだ。こいつが食<sup>た</sup>べたのだよ。」

「おばさん、どこかへいったの？」

「お使<sup>つか</sup>いにいったんだらう。」

<sup>ふたり</sup>二人は、ちよつとたいくつしました。

「なんかおもしろいことをして遊<sup>あそ</sup>ばない？」と、敏<sup>とし</sup>ちゃんがいいました。

「クロをいじめてやろうか。」と、徳<sup>とく</sup>ちゃんは、あちらに丸<sup>まる</sup>くなつてねむっている黒<sup>くろ</sup>ねこを見て、いいました。

「あのね、徳<sup>とく</sup>ちゃん、いいことがある。」と敏<sup>とし</sup>ちゃんは、徳<sup>とく</sup>ちゃんの耳<sup>みみ</sup>もとへ小<sup>ちい</sup>さな声<sup>こゑ</sup>できさやきました。

「いい思おもいつきだね。きつとおもしろいよ。」

「僕ぼく、ふくろをさがしてくるから。」と、徳とくちゃんながは長ながひばちの  
ひきだしをあけて、紙かみのふくろをさがしていました。

「あつたかい？」

「あつた。」

あつおおい大おおきなふくろを見みつけると、よろこんでとんできました。

二ふたり人は、黒くろねこのそばへ用ようじん心こころぶかくやってきました。「ニヤア

。」と黒くろねこは、うしろ向むきになつたまま、いたずらをしてはい  
けないというふうに鳴なきました。これをきくと、二ふたり人はおかしく  
なつて、とうとうわらい出だしてしまいました。

「知しっているんだね。」

「知っていたっていいや。」

二人は、クロの頭に紙のふくろをかぶせてしまいました。

大きな黒ねこはおき上がって、後じさりをはじめて、そのふくろを取ろうとしました。けれど、どうしても取れないのでおどりだしました。二人はいつしよにとびまわって、おもしろがっていました。

このとき、おばさんの帰ってきたもの音がしたので、徳ちゃんはいそいでクロにかぶせた紙ぶくろを取ってしまいました。

「なにをして遊んでいたの？」と、おばさんは、へやにはいつてようすを見て、

「おまえさんたち、ねこをいじめたのかい？」と、おっしやいま

した。

ふたり  
二人は、頭あたまをふつてわらっていました。黒くろねこは、おばさんのところへいって、ゴロゴロとのを鳴ならしていました。これを見みると、敏としちゃんは、

「ねこも、やっぱりきりぎりすのように、ものがいえないのだな  
。」と思おもいました。

もののいえないものが、みんなかわいそうになりました。いつかまた、敏としちゃんは、ひとりぼんやりと考かんえこんでしまったのです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

初出：「大毎ロードモ」

1934（昭和9）年10月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# もののいえないもの

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>